

広島県三次市南畑敷町

むねすけいけ ひがし こふん

宗祐池東古墳

発掘調査現地説明会資料



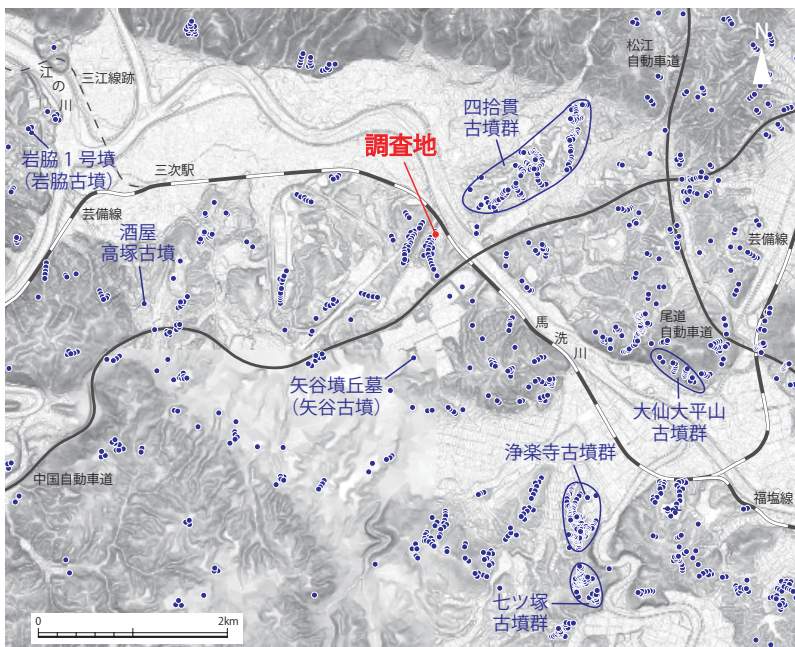
1. はじめに

株式会社島田組では、三次市発注の「市道十日市 194 号線宗祐池東第 2 号古墳発掘調査業務委託」を請け負い、本年 9 月から発掘調査をすすめています。三次工業団地と市道宗祐線を結ぶ市道十日市 194 号線建設工事に伴うもので、建設予定地内の古墳 1 基（仮称「宗祐池東古墳」）を対象とした記録保存調査です。島田組による三次市内の遺跡の発掘調査は、今回が 4 遺跡目となります。この宗祐池東古墳の調査が、三次市の歴史のさらなる一端を知る一助となりましたら幸いです。

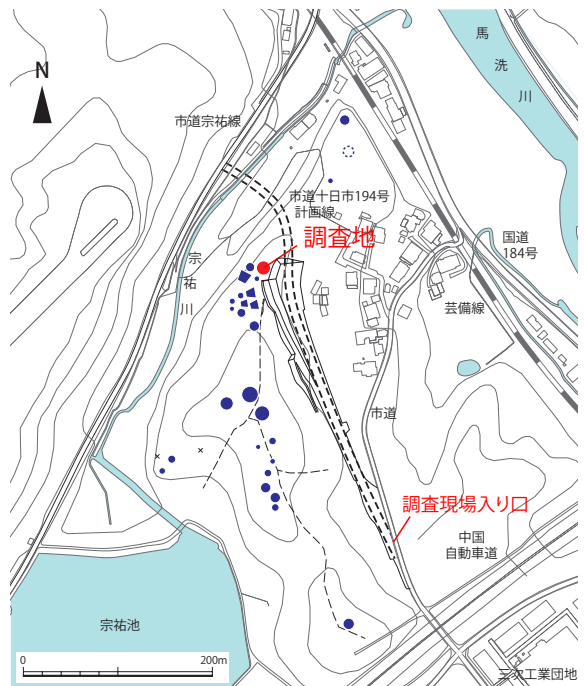
2. 立地と環境

調査対象である宗祐池東古墳は、三次市南畑敷町（みなみはたじきまち）に所在する古墳です。広島県北部、三次盆地のほぼ中央部、江の川支流の馬洗川（ばせんがわ）南岸の低丘陵上に位置しています。一帯は、三次地域のなかでも有数の遺跡密集地で、旧石器時代の下本谷遺跡、弥生時代前期の集落跡を含む高峰遺跡、同中期の初源的四隅突出型墳丘墓を含む宗祐池西遺跡、同終末期の四隅突出型墳丘墓の矢谷墳丘墓（国史跡「矢谷古墳」）、古墳時代後期の集落跡を含む松ヶ迫遺跡群、古代の三次郡衙跡の下本谷遺跡（県史跡）などが知られています。古墳についても、約 4,000 基の古墳が存在する三次地域のなかでも比較的密集度の高い地域で、宗祐池東古墳群・宗祐池西古墳群・緑岩古墳などの古墳が分布し、馬洗川対岸の四拾貫古墳群とともに、古代三次郡の「播次郷」（ハタスキ、後世の畠敷（ハタジキ）・八次（ヤツギ）地域）に重なるまとまりを形成しています。

本古墳が属する宗祐池東古墳群は、県北有数のため池である宗祐池から北流する、宗祐川の東岸の標高 207m（国道 184 号からの比高差約 43m）の丘陵上に分布しています。同一丘陵上では、近年の踏査によって、本古墳含む 28 基の古墳が確認されています。丘陵頂部にある直径 14～18m の円墳 3 基を最大規模として、北側尾根線上に 15 基、南側尾根線上に 8 基、西側尾根線上に 2 基が並んでいます。今回が初めての本調査となるため、古墳群の詳細は明らかではありませんが、丘陵頂部の一群は三次地域で典型的な 5 世紀代を中心とする古式群集墳と考えられ、北側尾根の一群はそれよりもやや古い時期で、逆に西側尾根の一群は横穴式石室を埋葬施設とする新しい時期と推測されます。今回の調査対象である仮称「宗祐池東古墳」（古墳号数は整理中）は、北側尾根の一群の北端の傾斜面上（墳頂部標高 193.8m）に位置しており、眼前に馬洗川への眺望が開ける好立地です。



三次盆地 古墳分布図（●は古墳） 地理院地図傾斜量図上に作成



宗祐池東古墳群 分布図 国土地理院基盤地図情報上に、調査地付近は地形測量、その他はGPS測量により作成

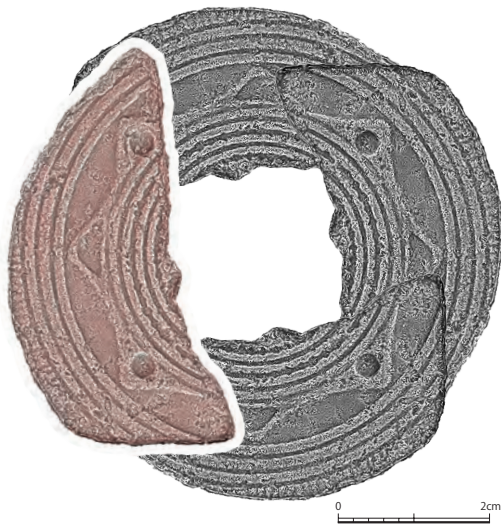
5. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物としては、銅鏡・土師器があります。これまでのところ、埋葬施設内の遺物としては、竪穴式石槨 SX01 の内部は未掘削のため不明であり、箱式石棺 SX02～05 では 03・04 から土師器の細片各 1 点が出土したほかに、副葬品は認められていません。墳丘上面の遺物としては、表土付近において、銅鏡片・土師器高杯片が出土しています。また周溝内では、墳丘の北側（斜面下方側）において、多数の土師器片が出土しています。土師器片のほとんどは細片で、形の復元可能なものは極めて限られますが、二重口縁の壺または甕片が認められます。なお、須恵器・埴輪は出土していません。

銅鏡は、墳丘上面の表土直下から出土したものです。長さ 5.2cm 分が残存しています。縁部および鈕を欠失し、全体の大きさは不明ですが、残存部分の復元径は 6.7cm です。重圏文鏡・八弧内行花文鏡の両方の特徴を持つ国産の小型倭鏡（仿製鏡）とみられ、そのなかでも古い形式です。破片の外端は円弧状に整えられているようです。

土師器のうち高杯は、墳頂部の中心埋葬 SX01 の直上の表土中から出土したものです。椀形高杯の脚部とみられ、破片端部に穿孔があり、外表全面には赤彩が認められます。椀形高杯は古墳時代前期でも古い段階の遺物で、広島県内での出土は珍しい例です。墳丘上で供献使用された可能性があります。

土師器のうち二重口縁片は、墳丘北西側の周溝内の墳丘裾部から出土したものです。壺・甕形土器の口縁部です。一部に赤彩が残ります。墳丘上で供献使用されたのち、周溝内に転落した可能性があります。



墳丘上出土 鏡片（左の破片。同一片を回転合成）
※3D 図のため、実物と色が異なります



墳頂部出土 土師器片（高杯）



周溝出土 土師器片（二重口縁壺・甕）

6. まとめ

今回の調査で、宗祐池東古墳は、三次盆地では中規模となる直径約 14m の円墳で、埋葬施設として竪穴式石槨 1 基・箱式石棺 5 基の計 6 基が構築されていることが明らかとなりました。出土遺物としては、現時点で銅鏡・土師器があります。築造時期は、調査途中のため検討中ですが、古墳時代前期のなかでも古い段階に位置づけられそうです。

弥生時代から古墳時代に入ると、畿内で確立したヤマト王権の影響が地方へと波及します。三次地域では、山陰的な方形の四隅突出型墳丘墓の築造が終焉し、伝統的な小型方墳とともに、畿内的な前方後円墳・帆立貝形古墳・円墳が築造されるようになります。一方で、多数の埋葬施設を設ける集団墓的あり方は、四隅突出型の矢谷墳丘墓（三次市東酒屋町、国史跡「矢谷古墳」）の 11 基を代表例として、弥生時代以来の伝統的墓制といえます。三次地域において古墳時代前期前半の古墳は明確ではありませんが、その可能性のある古墳として、大仙大平山 21 号墳（三次市向江田町）では、一辺 10m の方形台状墳丘に、礫槨状割竹形木棺 1・箱式石棺 6・石蓋土坑 2 の 9 基が確認されています。また岩脇 1 号墳（三次市粟屋町、県史跡「岩脇古墳」）では、首長級の直径 30m の大型円形墳丘に、竪穴式石槨 1・箱式石棺 4・石蓋土坑 1・礫床小型木棺 1 の 7 基が確認されています。いずれも、本古墳のように河川を眺望する傾斜面上に立地しますが、出土遺物に乏しく、築造時期は明らかではありませんでした。



岩脇 1 号墳 墳丘測量図
（『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』2018）

今回の宗祐池東古墳の調査では、伝統的な集団墓的性格を残しつつ新たな円形墳丘を築造するという、弥生時代から古墳時代への過渡的な様相が、築造時期を示唆する遺物とともに明らかとなりました。これは、約 4,000 基もの古墳が存在しながら長らく空白であった、三次地域の古墳時代史の 1 ページを明らかとする重要な成果といえます。三次地域の山陰志向から畿内志向への転換、ひいてはヤマト王権による地方支配の実態を紐解くうえで、本古墳の調査成果が生かされると期待されます。

今後の調査では、墳丘・埋葬施設の解体をすすめながら、墳丘・埋葬施設の構築過程を検討する予定です。引き続き周辺住民の皆様・関係者の方々にはご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力のほど、何卒よろしくお願いいたします。

